

山の百花

読者委員 甲申 珍子

【65】フユザクラ

昨秋、かねがね一度は訪れたいと思つていた芦生の京大研究林が、大津講師の山行メニューで取り上げられ、ついに積年の宿願を果たすことができた。もちろん今回は広大な研究林の片鱗に触れたにすぎず、さらなる企画を今後に期待している。

帰りがけの駄賃(?)に京都にもう一泊して、翌日は湖東三山を歩いた。紅葉はまさに真つ盛りだったが、作られた庭の華やかさと人出に少し疲れ、芦生の自然林の落ち着いた黄葉が懐かしく思われた。

三山の一つ西明寺に、燃えるようなカエデと並んで桜が咲いていた。寺で「不断桜」と名付けるこの桜は、有名な群馬県鬼石町桜山の桜と同じ、年に二回、春と秋に咲くフユザクラであると思う。

自生する野生種の桜の代表はヤマザクラで、古くは桜といえばヤマザクラを指したという。葉の展開後に開花するので、ソメイヨシノなどに比べると地味ではあるが、深みのある柔らかい色合いが私は好きだ。

富士山や箱根を中心に咲くマメザクラも葉が開くのとほぼ同時に開花し、花期が長く、下向きにつつましく咲く小ぶりの花はマメザクラの別名にぴったりする。

秋の紅葉の蔭で静かに咲くフユザクラが、このマメザクラとヤマザクラの雑種だと聞くと、なるほどと頷ける気もする。



【66】アブラチャン

春浅い頃に咲く樹の花には、マンサクやキブシなど、黄色い花が多いような気がする。中でもアブラチャンは、まだ冬枯れの残る山肌の一角を、ひとときわ明るい黄色で

いろどる。

アブラチャンとは面白い名だが、その由来は樹の幹や実が油分を多く含むことからきており、チャン(歴青)はタールなどの総称だという。材質が硬いので、昔はこの木から輪かんじきを作ったというから、山登りとは関係の深い木だともいえる。

アブラチャンとそっくりのダンコウバイはともにクスノキ科クロモジ属で、樹皮や葉から良い香を放ち、細い幹が根元からむらだつて株立ちするなど、似た点が多い。

近くに寄って見ると、アブラチャンの花には花柄があるがダンコウバイにはないことや、花の塊がダンコウバイのほうが幾分大きいことなどから簡単に見分けられる。

また遠くから見た場合は、ダンコウバイのほうが鮮やかな黄色で、アブラチャンは少しすんだ緑黄色に見えることから見分けることができる。

しかしそんなことより、まだ裸のままの木が多い山の雑木林で、そこだけ明るく灯がともったように咲くアブラチャンやダンコウバイの花に出会うと、もう春だなあと、いう実感で心のぬくもる思いがする。